

2017年春号 研究室だより

卒業生、修了生のみなさまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、2016年度の西洋史学研究室の近況をご報告させていただきます。

2016年度の教員スタッフは、岡崎敦教授（フランス中世史・アーカイブズ学）のもと、学内から講師として熊野直樹教授（ドイツ現代史）、野々村淑子教授（イングランド近代史）、阿部俊大准教授（スペイン中世史）、また外部からの非常勤講師として福岡大学の森丈夫教授（初期アメリカ史）、熊本大学の中川順子准教授（イングランド近世史）と三瓶弘喜准教授（アメリカ近現代史）の先生方をお招きし、多様な時代と専門をカバーする演習と講義が開講されました。

このような先生方のご指導のもと、学部生・大学院生あわせて20名が勉学に励んでおります。今年度最大のニュースと言え、何といたっても10名もの進学生を迎えられたことです。石橋莉久里くん、窪みさとさん、坂本隼人くん、寺本真三郎くん、新留郁海さん、平田哲也くん、廣田春香さん、藤村柚紀子さん、山崎有紗さん、山崎理子さんが元気いっばいの新メンバーとして加わり、とても賑やかになりました。再び西洋史学が人気のある研究室として、多くの進学生を迎えられるようになったことを一同喜ばしく思っております。かわって、2017年1月には、学部4年の古賀裕磨くんが、19世紀アルジェリアに関する卒業論文を提出し、2月には公開での発表会を行いました。

8月のオープン・キャンパスでは、フランスに留学していた廻康輔くんと岡龍三さんが留學生活について報告しました。入れ違いに、川上達也くんが秋からドイツに留学し、帰国後の2017年4月に帰朝報告会が行われました。OGの大場はるかさん（専門研究員）も、奨学金を得てローマで日欧関係史の研究を行われるなど、海外に羽ばたくという本研究室の伝統はこのようにしっかりと継承されています。

大学院では修士一年に隈部雄大くん（イタリア中世史）が進学し、15世紀フィレンツェの教育思想史というテーマで研究に励んでいます。また、博士課程の高津智子さんは、『九州歴史科学研究会』に論稿が掲載された一方、現在博士論文提出の最終段階を迎えています。OGの大浜聖香子さん（フランス中世史）については、この度目出度く博士論文を完成され、2017年2月に公聴会が行われました（3月に学位取得）。

本研究室に事務局がある学会として、九州西洋史学会が春期（2016年3月）に個別報告大会を、また秋季には（11月）、岡崎先生が登壇された「資料と公開性」に関するシンポジウムを開催し、大変活発な議論が行われました。同学会の若手部会では、8月のビブリオバトルで参加者である学部二年の坂本・平田両君がチャンプ本として表彰され、11月の研究報告会では学部4年の古賀裕磨くんが卒論のテーマであるフランス近代植民地史について報告を行うなど、学部生が大活躍しています。今年からは研究室の学生が主体的・積極的に学会に参加しており、他大学の研究者や学生との交流を通じて多くの刺激を受けています。また、例年通り12月に開催された九州史学会西洋史部会でも、全国各地から、多様なお専門の方々にご報告、ご参加いただいております。このように、本研究室は九州における西洋史学研究の、そして若手研究者育成の拠点として、周辺の大学や研究教育機関と緊密に提携しながら、研究教育活動を積極的に展開しています。

最後に、研究室行事をお知らせいたします。4月には「進学式」と「進学生歓迎コンパ」を楽しい雰囲気の中終え、夏のオープン・キャンパスや「進学ガイダンス」では、学部生が主体となって西洋史学の魅力をアピールしました。このような行事の際には卒業生の方々や非常勤の先生にもご参加いただいて毎回打ち上げを行っており、また学生が主体的に多くのコンパを開催することで、研究室の絆が深まっております。このようなアットホームな研究室の雰囲気によって、きっと来年度も定員満員の進学生を迎えられるのではないかと期待しております。

それでは末筆ながら、卒業生のみなさまのますますのご発展を心からお祈りいたします。

(文筆 高津智子、隈部雄大)

新刊紹介

岡崎敦、星乃治彦ほか『新しく学ぶ西洋の歴史』ミネルヴァ書房、2016年。

宮松浩憲『中世、ロワール川のほとりで聖者たちと。』九州大学出版会、2017年。